

## エスペラント朗詠短歌通信添削 (6)

前田茂樹

### エスペラント朗詠短歌募集要項

- 1、一人二首まで
  - 2、匿名可
  - 3、テーマ自由
  - 4、日本語で短歌の意味、もしくは原文の日本語の短歌を添える
  - 5、あて先 ノーバ・ボーヨ編集部  
〒 621-8686 京都府亀岡市天恩郷大本本部内  
FAX 0771-25-0061 e-mail officejo@epa.jp
  - 6、作品は添削後誌上で発表
- 

### 作品 A

Arde preĝu ni  
por kvietigi mondon  
en Secubun-fest'  
Nun egoismo svarmas  
ĉie; tra la tuta mond' .

<解説> 拍子も含めて創作の姿勢はこれでよいと思います。その上で気になる点を考えていきましょう。その前に、こちらへ作品を送って来られるときにタイプミスがあったと思われる箇所を訂正しておきます。まず、三行目の末から四行目の頭ですが、Nun が大文字になっていますので、ここから文がはじまっているとしたら、Secubun-fest' のあとは punkto が必要です。最後の行の ĉie のあとの punkto-komo は意味を持ちませんから削除します。

さて、一行目の Arde preĝu ni (熱心に祈りましょう) と一人称複数、いわゆる u-modο にすると、どうしても決意、決心の意味が強くなり、臨場感に欠ける表現となります。Arde preĝas ni と現在形にすれば、「今、私たちは真剣に祈っています」という意味になり、時間的ニュアンスとともに情的ニュアンスも強調されます。これは、あくまでも解説者の考えで、作者の意向とは異なるかもしれません。それから arde は「ひたに祈りたる」の「ひたに〜」にあたる語ですが、作者はおそらく serioze, fervore, rektanime など訳語の候補に考えておられたのではないかと思います。そこで、Nun fervore ni または rektanime (serioze) ni として、preĝas を次の行にもってくる方法もあります。

二行目の por kvietigi mondon で少し気になるのが 冠詞の無い mondo です。地球上の人間が住んでいる世界の意味なら、la をつけたほうよいかもしれません。ただ、kvietigi を使う場合、silabo の数が一つ余分になり拍子が狂うため、別の単語を選び文を構成しなければなりません。一つの方法として、silabo の少ない paciĝo を名詞として使い、por la paciĝ' de l' mondo とするか、あるいは、すでに説明したように、一行目を Nun fervore ni または Rektanime ni として、Rektanime ni / pripreĝas la mondpacon とすることもできます。

四行目の Nunからはじまる frazo は、「我よしのものはびこる今に」と「今」が強調されていますので、nun, kiam svarmas ~ という形が使いたいのですが、silabo に数の余裕がありません。そこで、nun をあきらめて、ĉar を使えば意味も明確になります。そのあとの egoismo svarmas は、egoistoj svarmas のほうが分かりやすいと思います。

### 参考例 1)

Arde preĝas ni  
por la paciĝ' de l' mondo  
en Secubun-fest' ,  
ĉar egoistoj svarmas  
ĉie tra la tuta mond' .

### 参考例 2)

Rektanime ni  
pripreĝas la mondpacon  
en Secubun-fest' ,  
ĉar egoistoj svarmas  
ĉie en la tuta mond' .

---

### 作品 B

Padon kovras neĝ' ,  
ni grimpas al monto.  
Kiel blanka arb' !  
La piedsigno daŭras,  
vidas frosta glaci-lag' .

<解説> 一行目は、原文の日本語によると、「雪が降って山道を覆って～」とありますので、この frazo では味気ない気がします。雪が降っている情景を表現しましょう。Neĝas sur la pad' . 二行目の grimpi に普通 al は用いず、grimpas sur la monton のように対格を伴う前置句を用います。三行目は、「雪で白くなった木」を見て感嘆している表現ですが、木が一本だけということはないので、

arbar’ を使ったほうがよいでしょう。Silabo の数の加減で kiel が使えませんから、ひとまず blankas la arbar’ としておきましょう。

問題は四行目と五行目の frazo です。「我らの足跡つづき～」とありますので、la piedsigno daŭras では、自分たちの足跡が歩く後ろにつづいてゆく意味ではなく、前に行く人の足跡が自分たちの前につづく意味になってしまいます。したがって、postlasas ni la spurojn のように表現しなければなりません。それと、piedsigno を使う場合は複数語尾が必要です。

五行目は silabo の数は七つですが、文法的誤りがあります。まず、動詞 vidas は他動詞で対格語尾を必要としています。したがって、次の frosta glaci-lag’ は frostan glaci-lagon としなければなりませんし、vidas の主語が欠けています。それと、glaci-lago という造語は、厳密には、例えば、glacia monto は「氷山」、glacia dezerto は「氷原」という意味になり、glaci-lago は glacio lago (glacia lago) であり、原文の意味である「氷の張った池」のニュアンスとは異なります。原文では「氷の張った池に出会う」という情景説明をしていますが、これらの内容を七シラブルで言い尽くすのは大変困難な作業といえます。したがって、この最後の行は Glaciiĝas la laget’ したいのですが、行のはじめに接続詞の kaj を置く必要がある場合は、kaj glacias sur la lag’ とします。

### 参考例

Neĝas sur la pad’ ,  
ni grimpas sur la monton,  
blankas la arbar’ ,  
postlasas ni la spurojn,  
graciiĝas la laget’ .  
(kaj glacias sur la lag’ )